

船着き場

私たちは、たくさんの荷物を運んだり、遠くへ出掛けるのに、船（海路）、自動車（陸路）、飛行機（空路）を利用することができます。自動車、飛行機がなかった昔は、その役割のほとんどを舟に頼っていました。

船の歴史は古く、人々が海峡を渡って移動をはじめた後期旧石器時代には、すでに利用されていたと考えられています。旧石器時代の船は見つかっていませんが、伊豆諸島神津島産の黒曜石を利用して作られた石器が関東地方一円に分布することや、西日本に分布する剝片尖頭器が朝鮮半島の旧石器文化と共通することなど、船を利用した行き来があったことを裏付けています。

縄文時代には、船が盛んに利用されたことが確かめられています。縄文時代の船は、丸太を削り抜いて作った丸木舟で、日本全国で80例ほど出土しています。

縄文時代の舞鶴市浦入遺跡の丸木舟もその一つです。浦入遺跡の丸木舟が出土した場所では、長方形の平たい石が見つかっ

て、舟を停泊させるいかりし碇石と考えられるものの、その近くに船を括りつけた棧橋と思われる杭がありました。

弥生時代になると、準構造船が作られ、船が大型化します。積み荷も多く積める



由良川の自然堤防上につくられたムラ（志高遺跡）

ようになり、日本各地や朝鮮半島との間で往来が盛んになりました。鳥取県^{あおやかみじち}青谷上寺地遺跡では、板に船団を組んでいる様子を描いた絵があり、弥生人が海洋に出ていったようすが想像できます。



土や石を積み上げて造った船着き場（志高遺跡）

弥生時代中期には、船荷の積み下ろしや、補修をしたりする船着場が造られます。『魏志倭人伝』に登場する一支国と見られる長崎県^{い き}壱岐にある^{はる つじ}原ノ辻遺跡では、弥生時代中期の石組みを持つりっぱな船着場が見つかります。日本列島と朝鮮半島との交易で行き来した船が^{けいりゅう}繫留された船着場でしょう。

舞鶴市^{しだか}志高遺跡で見つかった堤防状遺構も、こうした船着場の一つと考えられるものです。50 m前後の堤防状遺構の中央部に陸橋がついたT字形の遺構で、川に面する部分を貼り石で護岸していました。日本海側屈指の河川である由良川^{ゆらがわ}に面しており、由良川沿岸の水上交通の拠点として造られた船着場と考えられています。

由良川の河口部は、丹後半島の東の付け根にあり、丹後地域と丹波地域を結ぶ大動脈です。弥生時代後期の丹後地域は、たくさんのガラス製品、鉄製品を保有する豊かな地域であったことがわかっています。これらは海上交通を利用した交易により、もたらされたものと考えられています。

大型の準構造船が、日本海沿岸各地を旅して得た豊かな物産を積んで、由良川を遡上する様子が想像されます。

（田代 弘）